

第38回

## 中世・ルネサンス期の音楽 ～西洋音楽の歴史と鑑賞（8）～



講師  
沼野 雄 司

学習のねらい

これまで、「西洋音楽の歴史と鑑賞」では、バロック時代から現代にいたるまでの音楽を扱ってきました。今回、焦点をあてるのはバロック期よりも前の時代、中世からルネサンス期にかけての音楽です。バッハよりもさらに前の音楽だけに、その性格は我々の知っている「クラシック音楽」とは少しばかり様相を異にしているように見えるかもしれません。しかしこれらの音楽は間違いなく、西洋芸術音楽の基盤を成しているのです。

### ヨーロッパの中世からルネサンスにおける音楽のあり方について考える

「音楽」と呼び得るものは、おそらくは人類の誕生後、それほど遠くない時期に成立したものであると思います。世界各地でさまざまな音楽活動が行われていたことが絵画などの資料から明らかになっていますし、古代ギリシャでは音楽劇や音響理論が大きな発展を遂げました。しかしながら、そのほとんどは楽譜が残されていないために、具体的にはどのような響きだったのかわかりません。ゆえに具体的に音楽史をたどる場合には、楽譜が残されている8世紀ごろを1つの起点とすることになります。

「グレゴリオ聖歌」の名で呼ばれる一連の単旋律聖歌（一本の旋律による聖歌）は、その代表的な例です。おそらくこれらは、宗教的なテキストを「お経」のように唱えるうちに、その言葉の抑揚が徐々に音楽的な形をとっていったものなのでしょう。ゆえにほとんどのグレゴリオ聖歌の作曲者は不明です。

これらの音楽は、耳を喜ばせるような劇的な展開といったものには乏しいながらも、川の中の石が長い時間をかけて水に削られて、まろみを帯びていくような自然な息づかいが大きな特徴であり、また魅力とも言えます。

### キリスト教と西洋音楽の関係について理解を深める

西洋音楽史は、グレゴリオ聖歌のような簡素な旋律が楽譜に記され、蓄積され、そしてそれが時代を越えて修道院や教会で演奏される中で、徐々に形成されていきました。その意味では、こうした聖歌群はヨーロッパのクラシック音楽の源流といってよいでしょう。

そしてご存じのように、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリアといった音楽史でもな

じみ深いヨーロッパの国々は、宗派の違いはあっても、基本的にはキリスト教を国教にする地域です。ということは、つまりクラシック音楽というのは、実はキリスト教の宗教音楽を基盤にして発展した音楽ともいえるのです。実際、中世やルネサンス期においては、大規模な「ミサ曲」が盛んに書かれることになりました。

「ミサ」というのはパンと葡萄酒<sup>ぶどう</sup>をキリストの肉と血にみたてて行う、教会でもっとも重要な儀式ですから、作曲家たちもこの「ミサ」のために、腕によりをかけて、高い技術を駆使した音楽を作ったというわけです。

### グレゴリオ聖歌からジョスカン・デ・プレにいたる音楽を体験する

グレゴリオ聖歌があらわれる8世紀ごろから15世紀半ばまでを、音楽史では「中世」と呼んでいます。この時期の音楽の1つの特徴は、グレゴリオ聖歌を基にして、それに注釈を加えるようにして作曲されているという点にあります。

たとえば12世紀にパリで活躍したレオナン（彼はノートルダム大聖堂を拠点にして活躍したので「ノートルダム楽派」の一人に数えられています）は、古くからあるグレゴリオ聖歌に新しい声部を加え、さまざまな装飾をほどこしながら大規模な作品を作り上げました。さらに、15世紀半ばからを音楽史では「ルネサンス期」と呼んでいますが、この時代には、中世とは比較にならないほど多くの声部が交差する、複雑で立体的な作品が数多く書かれました。さらに、音楽史におけるルネサンスを代表する作曲家のひとり、ジョスカン・デ・プレの「アヴェ・マリア」を聴くと、その精密かつダイナミックな表現に多くの人が驚くことでしょう。多少大げさにいえば、ここからバッハやベートーヴェンの音楽までは、ほんの少しの距離しかないようにも思えるのです。

#### ♪ 今回取り上げる曲 ♪♪

- 「グレゴリオ聖歌」
- 「ノートルダム・ミサ曲」 作曲：マショー
- 「地上の全ての国々は」 作曲：レオニヌス（レオナン）
- 「愛よ、この乙女を」 作曲：ランディーニ
- 「アヴェ・マリア」 作曲：ジョスカン・デ・プレ